



『宗教教団の生命倫理への 取り組み』

曹洞宗総合研究センター

平子 泰弘

宗教教団と生命倫理の関わり合い

- ▶ 各教団が生命倫理を課題に掲げた歴史は古くない。
- ▶ 臓器移植に伴う脳死の問題に際して。
1992年（平成4）「脳死臨調」の「脳死は人の死である」とする最終答申に対して起きた議論の中で、宗教教団・宗教者としての見解が示されていた。
- ▶ 「脳死・臓器移植に対する仏教的なあり方」中野東禅
（『教化研修』31、1987）
- ▶ 『特集：生命操作』（季刊『仏教』No.34、1996）
- ▶ 『中絶・尊厳死・脳死・環境 生命倫理と仏教』中野東禅
（雄山閣、1998）

臓器移植法案改正時前後の動き

- ▶ 1997年の制定後、実際の臓器移植の実施やそれに伴うさまざまな意見が出される中で、各宗教教団においても「死」をどのように捉えているかを論じる動きが大きくなっていく。社会全体に対して倫理学や哲学者だけでなく、宗教の立場からも意見表明をする、もしくは求められるようになる。
- ▶ 梅原猛『脳死と「臓器移植」』(1999)
山折哲雄「臓器移植は仏教の教えに反する」(2000)
立花隆『脳死』(1988)『脳死再論』(1991)
- ▶ 日本宗教連盟 (教派神道連合会、全日本仏教会、日本キリスト教連合会、神社本庁、新日本宗教団体連合会の五団体からなる)
「臓器移植法改正問題に対する意見書」(2006.11.16)
以降「法改正」に関する6つの意見書を発表

各教団発表の見解資料①

- ▶ 天台宗「脳死及び臓器移植について見解」（1995.12.20「脳死及び臓器移植」に関する特別委員会）
- ▶ 天理教「「脳死」をめぐって」（2004.10.1『道と社会—現代”事情”を思案する—』天理やまと文化会議編）
- ▶ 浄土真宗本願寺派『生死を問う—医療現場をめぐって—』（2001.10.5教学研究所ブックレットNo.5教学シンポジウム記録）
- ▶ 大本「脳死・臓器移植問題に関する大本の見解文」（1991.12.3発表声明、1992.1.20コメント）
- ▶ 大本「臓器移植法改正に対する要望」（2005.2.16自民党内調査会宛）

各教団発表の見解資料②

- 浄土宗「脳死・臓器移植問題に対する報告」(1992.9浄土宗総合研究所)、「脳死と臓器移植を考える」(1997.7.1『浄土宗新聞』)
- 真宗大谷派『脳死が問いかけるもの』〔増補版〕(1991.8真宗大谷派教学研究所ブックレットNo.2)
- 真宗大谷派「「臓器移植」法案の衆議院可決に対する声明」(1997.4.25真宗大谷派宗務総長)
- 真宗大谷派「初めての脳死臓器移植についての見解」(1999.3.16真宗大谷派宗務総長)
- 立正佼成会「臓器移植法改正案に対する提言」(2005.3.11自民党内調査会宛)
- 曹洞宗「「脳死と臓器移植」問題に対する答申書」(1999.4.1曹洞宗現代教学研究センター)

教団付置研究所懇話会・生命倫理研究部会の 発足と研究活動

- **教団付置研究所懇話会**：2002年（平成14）発足。宗教・宗派を超えて宗教者・教団に共通する課題について、各教団付属の研究所の研究者が集い、情報を交換と相互理解を深め、問題の解決や活動を増進していくことを目的として、年1回の研究発表・懇親を続けている。
会員数27研究所・団体（オブザーバーを含む）
2002年発表「生命科学と宗教」大本教学研究鑽所 齊藤泰
2002年発表「生命倫理を巡る諸問題」曹洞宗総合研究センター 竹内弘道
2005年発表「臓器移植を巡る現状と問題点」浄土宗総合研究所 今岡達雄
- **生命倫理研究部会の発足**：2005年(平成17)発足。研究部会（懇話会下部の組織としてテーマ毎に研究部会が設置され、希望する研究所が参加して運営が行われている。現在3研究部会が設置されている。）参加は現在約11研究所。年間で1～2回の講演会や報告検討会などを実施。生命倫理に関する情報の共有と討議を続けている。

生命倫理研究会での作業と議論

- 各教団発表の「見解」内容の説明、質疑応答を通して理解を深める作業
- 医学・生命倫理学の研究者から詳細な知識を教示していただき、問題点を確認する



- 各教団の見解を理解した上で、現代を生きる宗教者として共有できる点や、互いに尊重すべき考え方などを見出していく。
- 宗教者として考えるべき問題、視点の置きどころなどの討論

研究部会での議論の内容

—宗教教団はどうやって生命倫理を論じていったか？

- 〔前提として〕
各教団毎に全く異なる世界観や生命観を持っていること。
脳死・臓器移植問題についてもそれぞれの教義によって賛・否・その他の意見があること。
殊、先進医療についての知識を十全に具えていないこと。
- ①「脳死・臓器移植」に対する各教団の考え方の学び合い
（前出）各教団発表済みの見解・意見書などの資料を基に。
- ②医師や生命倫理研究者を招聘し、講演から深い知見を得るとともに、生命倫理の課題や宗教者として考えるべき問題点を共有していく作業。

検討の過程①

見解・意見書提出研究所

- ・ 大本教学研鑽所 ・ 金光教教学研究研究所 ・ 浄土宗総合研究所
- ・ 浄土真宗本願寺派総合研究所 ・ 真宗大谷派教学研究研究所
- ・ 曹洞宗総合研究センター ・ 玉光神社 ・ 智山伝法院
- ・ 中央学術研究所 ・ 天台宗総合研究センター
- ・ 天理大学おやさと研究所 ・ 日蓮宗現代宗教研究所（50音順）

見解・意見書の傾向

- ・ 脳死・臓器移植→賛成反対の二者択一的立場の表明には慎重な内容が多数（教理からの判断ができないこと）
- ・ 臓器提供そのものへの賛否は別れる。
- ・ 「脳死を一律に人の死」とする考えには否定的な内容が多数。

検討の過程②

- ▶ 議論を通して挙げられた論点
 - ・ 演繹的論理について
(結論ありきで、経典に典拠を求める姿勢)
 - ・ 「布施行」「慈悲行」などの宗教用語の本来持つ宗教的意味を理解する必要性
 - ・ 「生命／いのち」の概念規定について
 - ・ 「生命／いのち」の主体、所有者について
 - ・ 日本人の身体観について
(肉体と精神と峻別するような二元的考え方が成り立つか?)
 - ・ (死の) 自己決定権、「本人意思」について
- ▶ 今後の課題について
 - ・ 各見解・意見の共通点と相違点を見きわめること
 - ・ 「脳死≠人の死」と考える理由はどこにあるのか

検討の過程③

▶ 共通点と相違点について

- 生命の生まれてくる構造にはそれぞれの教義による違いが。
- いのちは与えられたものという考えは大方共通、
- 人の命と他の命（山川草木）に区別を持たないことも共通。
- いのちを継承・つなぐことの正しい受け止め方。

▶ 「脳死を人の死とする」ことへの違和感について

- 死を時間の経過のなかで受け入れてきたのではないか。
- 遺体を傷つけることへの嫌悪感。
- みたま（み霊、魂）の存在。

▶ 教義による生命観の検討と同時に、現代を生きる宗教教団として目の前にいる苦しむ者に対して、どのような救いができるかを考えていく必要がある。

議論のアウトプット

- 厚生労働委員会（厚生労働関係の基本施策に関する件（臓器移植））で日本宗教連盟事務局長が意見陳述（2007.12.13衆議院第16委員会室）
- 第19回日本生命倫理学会・分科会「いのちの尊厳と宗教」開催（2007.11.10大正大学）
- 国会参議院「第15回臓器移植法改定を考える緊急院内集会」（2009.7.8参議院議員会館第6会議室）
 - 宗教界からの緊急提言 — 「脳死は人の死ではない」
 - （1）見解発表「大本」「浄土宗」「浄土真宗本願寺派（西本願寺）」「真宗大谷派（東本願寺）」「天台宗」「日蓮宗」「立正佼成会」
 - （2）見解紹介「曹洞宗」「日本宗教連盟」
- 第21回日本生命倫理学会公募シンポジウムB「自死と宗教－教義と理念、そして実践へ－」（2009.11.14東洋英和女学院大学）
- 第22回日本生命倫理学会公募セッション「宗教は「いのち」をどう語ってきたのか？—近現代における「いのち」観の変遷—」（2010.11.20藤田保健衛生大学）

今日までの研究テーマ

- ▶ 自死問題（自殺問題）
- ▶ 尊厳死・安楽死問題
- ▶ 生殖医療問題、体外受精、代理母問題
- ▶ 再生医療、ES細胞、iPS細胞
- ▶ 慢性病へのサポート（患者と医療者の関係性の変化）
- ▶ エンディングノート
- ▶ 出生前診断

宗教教団（宗教者）の生命倫理問題への 取り組む姿勢

- その時々人びとの生き方を悩ませる「生命倫理問題」に対して宗教の立場から「捉え方」「考え方」を提示していく。
- 社会問題に対して常にアンテナを向け、知識を具えるとともに宗教者としてそこに感じる問題について検討する。
- 教理だけでなく、医学・法律・人権・民俗なども含めて、現代に生きる人びとの問題として、何をできるかを考えていく。
- 教団として生命倫理への関心を失わないように、継続して研究者を育成していく。

心理学に期待するところ

例) 脳死臓器移植法改正後も移植数が大きく伸びていない事実

例) 宗教・宗派に拘わらず「脳死」に対して肯定しにくい現状



そこには日本人固有の生命観や遺体への
感覚があるのではないか？

《提案》 そうした感覚は宗教教団の協働レベルでは
量りきれない。

日本人の持つ身体観・霊魂観などを、
心理学を用いて明らかにしていけるのではないか？